
進藤家の人々

れおまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

進藤家の人々

【ZPDF】

Z0460Z

【作者名】 れおまる

【あらすじ】

【立場とオチと意味】

- ・この小説に無いもの

1・巽の朝（前書き）

人物紹介

進藤紅音… 22歳O型。長女。ラーメン屋の店員。物事を細かく考
えるのが苦手。

進藤蒼太… 21歳大2A型。長男。穏やかで几帳面。酒に強い。

進藤巽… 17歳高2B型。次男。一応本作品の主人公。上と下に挟
まれ氣苦労が絶えない。

進藤みどり… 16歳高1AB型。次女。口数が少なく心配性。

進藤黄児… 10歳小4O型。三男。脳天氣で考えるのが苦手。食べ
ることが大好き。

進藤銀太郎… 48歳AB型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。小説
家で書斎に籠もっているので、出番はそれなり。

進藤輝子… 46歳B型。進藤家五人兄弟の母親にしてもう一本の柱。
お喋りするのが好き。

1
・異の朝

目を覚ますとまだ7時前だつた。

そして、俺が起きた瞬間に目覚まし時計が喚きだしたので、手刀で黙らせる。

ふつふつふつ・・・勝つたぞ!

ずっと連敗し続けだつたが、遂に白星を勝ち取つたんだ。

朝っぱらから満面の笑顔で制服に着替えて自分の部屋を出た。

「おみやげ？」

田の前には1階へと続く無情な道が広がっている。

落ちたら無事では済まないと必死で体勢を立て直すが、寝起きでまだ覚醒していない体は言つ事を聞かなかつた。

『...の...』

そのまま階段を転がり、顔面から無事に着地した。
いや、無事じゃなくて無様というべきか。

「ふあああ・・・お、異派手にやつたな」

階段の上で足を投げ出して寝ていた姉ちゃんが、欠伸混じりに話しあけてくる。

・・・あなたの仕業か、俺が躓いたのは。

「寝るなら布団で寝ろって言つてるだろー。」

「あつはつはつ、悪いね。疲れちゃつて部屋に戻るの面倒でもあー

悪怯れる様子も無く寝癖でぼぼぼこなつた髪をかきながら笑つて
いる姉ちゃん。

進藤紅音
あかね

5人兄弟の長女にして唯一の社会人だ。

とにかく大雑把で適當で、あと大雑把。

俺は大雑把という単語を見付けると心の中で姉ちゃんと呼ぶ。
基本的に5分以上難しい事を考えると頭がショートしてしまつ、思
案という言葉とは無縁の姉上である。

酷い目に遭わされたものの、よく見なかつた俺も悪いのでそれ以上
は何も言わなかつた。

「朝から騒がしいわね巽」

「あ、おはよう母さん」

「今日は早いのね。丁度ご飯出来たところだから食べなさい」

「うん」

ちょっととしたアクシデントはあつたものの、出来たての食事は美味
しいのでやつぱりついてる。

5つ並んだ椅子の真ん中に座つて、両手を合わせた。俺の場所はい
つもここだ。

湯気がたつているハムエッグをひとかけら口に入れたところで、姉
ちゃんと兄貴が降りてくる。

「おはよー、兄貴」

「おはー。どうした異、おでこに痣が出来てるだ」

「ちょっとね・・・」

言葉を濁しつつ姉ちゃんを睨むと、原因を察したのか兄貴は呆れた様に笑つた。

進藤蒼太
（しんとう そうた）

5人兄弟の2番目で長男、今年で大学2年生になる。
それなりには喋るけどあまり口づるわけは無くて、几帳面で頼りになるのだ。

姉ちゃんすら頼りにするくらいなので、ある意味5人兄弟のトップといつてもいい。

姉ちゃんは左端、兄貴はその隣に座る。5つある椅子のそれぞれの位置だ。

別に誰がどこだと決めた訳じゃなくて、小さな頃から我が家ではこれが当たり前だった。

「おはよう、みどり」

えつ、みどり？

兄貴の言葉に首を傾げながら右に振り向くと、既にみどりが座つていた。

「お前いつからいたんだ？」

「・・・ついさっき」

みどりは目線を動かさず答える。

よく気付いたな、兄貴。いつからいたのかさっぱり気付かなかつたのに・・・

進藤みどり

5人兄弟の4番目で次女、今年で高校に入学した。
兄弟の中では一番無口で表情もあまり変わらない。特技は気配を消すこと、らしいが・・・

「腹へつた～～～！」

みどりとは対照的に、あいつが朝から大きな声を上げながら階段を掛け降りてきた。

どすんどすんと床を響かせ、空いていた最後の右端の椅子に座る。

「あかねえ、そつこい、たつこい、みどねえ、おはよう！～」
「ママが抜けてるわよ、黄児。元気がいいわね」
「やうだつた！～おはよつ母ちゃん！～」

進藤黄児

5人兄弟の5番目で3男、今年で小学4年生になる。

元気いっぱい一番うるさい、進藤家の太陽みたいな存在だ。
食いしん坊で口々口々に太っている。

素直で純粋なので、家族で一番愛されているかもしれない。
だから、屈託の無さを持ったまま大きくなると姉ちゃんとみたいにならないか心配だ・・・

「行つてきまーす」

「1」馳走様。じゃあ母さん、行つて来るね

姉ちゃんと兄貴が早々と食事を済ませて家を出ていった。

俺とみどり、黄児とは違つて出勤及び通学に時間がかかるから仕方

なこのだ。

「・・・・・・・つこてる」

「おこしこよ」れー！みどねえちゅうだいー！」

口のまわりに食べかすをいっぴい付けて朝食を頬張っている黄児。みどりに世話を焼かれているにも関わらず、食べかけのハムエッグを奪った。

まったく食い意地の張つた奴だな。自分のだけじゃなく、姉ちゃんのまで奪うなんて・・・

困った奴だが、黄児の皿をうに食べる顔を見ていると何だか癒されてしまう。

「やばい、もう時間だ」

「黄児・・・」

「まだ腹一杯になつてないぞ！――

「どんだけ食うんだよ。それくらじこひとか」

時計は8時10分前を指している。もう行く時間だ。

どんぶりに3杯田のおかわりをよれおつとする黄児を、みどりと二人がかりで玄関まで運んだ。

「じゃあ行つて来る、母さん」

「氣をつけでねー」

父さんは今日も書斎に籠もつたままか。

ちゃんと仕事をしているつて事だから、喜ぶべきだな。

普通のサラリーマンなら説教しなきやならない反社会的な行為だけだ。

高校は隣駅にあり、歩いて通える距離だった。俺とみどりはそこを通っている。

「…………」

特に自分から話しかけてこず、みどりはただ黙々と歩いていた。別に今朝に限つた事ではなくていつもこんな感じだ。
姉ちゃんや黄児並みに喋つたら明らかにおかしい。

もしさうなつた暁には何かが憑依したとみて目の色を確認するべきだな。

歪んだ形で願いを叶えようとすると、実体を持たない異形の存在の仕業に違いない……

「…………お兄ちゃん」

「なつ、なんだ?!」

軽い妄想に耽つていたところを呼び掛けられ、不審な声を出してしまひ。

「危ない…………」

みどりの言葉の直後、俺の体に凄まじい衝撃が襲い掛かった。
すぐ傍にあつた壁に激突してしまう。

「ぐほおおおお……」

「いたいた、探したよみどり。はいこれ
…………後でいいつて言つたのに」

俺を跳ねた真っ赤な車から出たのは、クソ野郎ことお姉様だつ

たのです。

で、あるいは事か相手を無視して口々口をみどりに渡しています。

「じゃあね、みどり」

「遅刻しないでね・・・」

「おいで！―せめてごめんくらい言えや！―」

「ん？あ、いたの異。さつさと学校行きなさい。学生の内から遅刻

してるんじや社会でやつてけないわよ」

「轢き逃げして悪知れないと社会人どころか人間として失格だらうが！―」

しかし姉ちゃんは無視して走り去ってしまった。

「お兄ちゃんは強いね、車にひかれても痣だけで済むから

・・・ま、慣れてるからな」

慣れたくはないけれど、実はこうこう田に遭うのは初めてじゃない。今年だけでももう5回田だな。いずれもあの素晴らしいお姉様が加害者だ。

まったく悪気が無いのがもう、物凄い腹立つ。いくら姉であっても許せないね。

おかげで体が鍛えられてるけど、絶対に感謝なんかしないからな。

「あ、学校・・・」

校舎が見えてきた。

なんだ、結局今朝も代わり映えがしなかつたじやないか。

こんな感じで、俺の1日が始まるのだ。

（ 続 ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0460z/>

進藤家の人々

2011年12月1日21時53分発行